HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新潟県十日町市吉田地区鉢集落における地域資料の現地保存・活用の取り組み ： 「石仏・語らいの家」収蔵の民俗資料と生活記録文集
Author(s)	門脇, 洋子; 吉田, 弥生
Citation	社会教育研究, 36, 53-66
Issue Date	2018-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71112
Type	departmental bulletin paper
File Information	050-0913-0373-36.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【資料紹介】

新潟県十日町市吉田地区鉢集落における地域資料の現地保存・活用の取り組み
―「石仏（いしぼとけ）・語らいの家」収蔵の民俗資料と生活記録文集 ―

門 脇 洋 子*・吉 田 弥 生**

目　次

はじめに・・・

はじめに

近年、地域資料[1]をめぐって、その保存・活用のあり方が課題に上っている。地域住民の知的財産を守る砦である図書館や博物館においては、指定管理者制度の導入や首長部局の意向による地域資料取り扱いの縮小・廃棄、財政上の理由による館の休閉館が増えつつある[2]。このような状況下で、貴重な地域資料を収集してきた地域住民は、いざという時に図書館や博物館で資料を継承してもらえない、という不安が高まらざるを得ない。単に資料の保存を目的とするならば、地元施設での資料受け入れが不可能でも、その価値を見出す施設や研究者に委ねるという方法もあるが、現地における資料の保存・活用が持つ意味も多様な側面から検討されて然るべきではないだろうか。

本稿で紹介する新潟県十日町市では、地域資料の収集家や、郷土史に高い関心を持つ市民が多数活動してきた地域である。十日町市は中山間地域である上に世界有数の豪雪地であることから、厳しい自然を耐え抜くために生み出された暮らしの道具、郷土史を知ることのできる古文書等に思い入れのある住民も多い。十日町市博物館友の会では、1979 年の開館以来、古文書や郷土史、地場産業である織物、民俗、方言など多数の住民グループが活発に活動してきた実績がある。しかし、雪国の暮らしの知恵を知る住民や資料収集家は高齢化し、社会教育施設の再編が進む中で、資料の保存・活用のあり方が喫緊の課題になっている。

本稿では、十日町市のなかでもいちはやく地域資料の現地保存に取り組んできた吉田地区真田甲（通称「鉢集落」）の「石仏・語らいの家」のあゆみと現在抱える課題について述べ、続いて収蔵資料を紹介する。当事例は、尾身ミノさんを中心とする鉢集落の住民と、立教大学学芸員課程の実習（1976 年度）で鉢集落を訪れた人々（以下、「鉢の同窓会」メンバーとする）が、鉢集落の生活の中で使われてきたもの・生み出されてきたものを民家であった建物で保存・活用に取り組んできた点が特徴的である。

ここで、「石仏・語らいの家」（以下、語らいの家とする）のある鉢集落の概要と、語らいの家の家主である尾身ミノさんの略歴を示しておく。

1　本稿では、『図書館調査研究リポート』No.9（国立国会図書館、2007 年）に基づき、「地域資料とは、地域レベルで過去に発生し現在まで保管されてきている資料と、現在地域で発生している資料の両方を含む概念であり、その範囲は、図書、雑誌、新聞、地図、パンフレットのような印刷資料（行政刊行物を含む）、写真、フィルム、マイクロ資料、磁気あるいは光媒体に記録された資料、さらに、文書・記録、美術品、博物資料などの現物資料のような多様なものを含んでいる」との定義を用いる。類似する表現として「郷土資料」も使用されることがあるが、当リポートの調査によると、「「郷土資料」という名称は、図書館で長年使われていることもあり、今回の調査でも使用している図書館が多かったが、歴史的な資料というイメージがあり、行政資料や比較的広域的な資料を収集したいと意図する図書館は、他の名称を使用していることもあると思われる。」と分析されている。

2　新岡 昌幸「公立図書館と指定管理者制度―その法的限界―」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第 130 号、北海道大学大学院教育学研究院、2018 年。瀧端真理子「公益法人制度改革が公立博物館にもたらす影響」『追手門学院大学心理学部紀要 4』追手門学院大学、2010 年。寄贈資料の廃棄については、近年だと穴水町立図書館（「広報あなみず」No.682、平成 26 年 9 月号）の例がある。

鉢集落は、十日町市中心部から約 10㎞ 離れた山村で、標高 300～360m の東西に細長く位置している。1960 年の 131 戸 678 人をピークに人口は減少の一途をたどり[3]、2018 年 4 月末現在は 54 戸 133 人である。主な産業は農業であるが、狭い農耕地のために多くが兼業農家である。全世帯が尾身姓である。

尾身ミノさん（以下、ミノさん）は、1930 年に鉢集落の大工の一家に生まれた。1945 年 3 月に高等科を卒業し、戦時中から終戦後まもなくは市外へ勤めに出ていたものの、社会の混乱のさ中で栄養失調となり鉢集落に帰ってきた。鉢集落では青年団に所属し、女子班の班長を務め、青年学級生の代表として弁論大会にも出場した。また、青年学級の機関紙に短歌や詩を寄せるようになる。1950 年に木挽き職人兼業農家の夫と結婚し、三人の子どもを授かる。1962 年から始まった真田婦人学級に参加するようになり、婦人学級の生活記録文集には欠かさず投稿し続けた。舅と夫の職死、長男の水死に見舞われるも、文集への寄稿や婦人会活動を通して、小学校のプール建設や季節保育所の実現など地域環境整備に取り組んだ。また、十日町市博物館友の会の初期からのメンバーで、民俗研究グループとして夫の職業であった木挽きのことをはじめとして多数の調査研究に取り組んだ。なお、1999 年に、文集や新聞に書いてきた文章をまとめた自分史『雪国に生きて』を発表している[4]。

本稿の構成は以下のとおりである。続く第 1 節では、「石仏・語らいの家」のあゆみと資料の保存・活用に関する今後の課題について、当施設の管理人である門脇洋子が詳述する。第 2 節では、収蔵資料について、門脇洋子と吉田弥生で紹介する。その際、社会教育研究における当資料の価値についても検討する。

1．石仏・語らいの家のあゆみ

新潟県十日町市吉田地区鉢集落には、明屋禅師により開山された「鉢の石仏（いしぼとけ）」という史跡がある。約 1 万㎡の敷地に、江戸中期の寛延 3 年(1750 年)から宝暦 12 年(1762 年)にかけて、信州高遠から石工を招いて大規模な工事を行い、延べ人足は 1 万人、大工・木挽き 150 人、石工 1165 人と伝えられ、現在まで近隣の人々の信仰を集めて大切に守られている。

この「鉢の石仏」に立教大学による 7 泊 8 日の民俗調査実習が行われたのは、1976 年 7 月（参加者 22 名）と翌 1977 年 3 月（27 名）のことであった。筆者はその夏の調査に学生として参加した後、同大博物館学研究室に 3 年間勤務、鉢集落の皆さんとも長く交流を続け、2010 年には地域おこし協力隊員として十日町市に赴任し、任期満了後も家族と共に十日町で暮らして現在に至る。

「石仏・語らいの家」とは、立教大学の元学生たちと、尾身ミノさんを中心とする鉢集落の人々との交流が生んだ、民俗資料を活用し、伝承しようとするユニークな試みであり、そのささやかな軌跡

[3] 新潟県十日町市教育委員会 立教大学学校・社会教育講座『十日町市における文化財の調査　Ⅴ』1979 年。
[4] 尾身ミノ『雪国に生きて』新潟雪書房、1999 年。私家版として発行されている。

をここに紹介していきたい。

1.1　尾身ミノさんによる民俗資料収集の経緯　～「明治・大正・昭和の館」にむけて～

鉢の調査報告である『十日町市における文化財の調査Ⅴ』（十日町市教育委員会・立教大学、1979 年）の中には、特例的に鉢集落の住民の手による「木挽きの仕事と生活」という文章が掲載されている。著者である尾身ミノさんは、調査実習の際に、民泊を引き受けてくれた方の一人である。ミノさんはもともと向学心が強く、学生たちが実習していた拓本にも興味を示し、石仏境内の石碑の拓本を採り続けて、表装して自宅の床の間に飾る腕前になったほどで、集落内でも努力家、勉強家として知られていた。彼女の夫は木挽き職人として親子二代で活躍しながら、作業中の事故のため、若くして命を落とした。夫の生業（木挽き）が、世間から忘れ去られていくことを悲しみ、近くで見聞きした自分が、少しでもその暮らしや技を伝えたいという望みを持っていた。

開館間近の十日町市博物館で民具資料の整理実習中に、ミノさんが寄贈した木挽き道具を目にした故中川茂夫教授は、「身近な者が確かな調査をすべきだ」と説き、木挽きについての報告をまとめるよう、強く勧めた。最初は戸惑いながらも、「故人の供養になるから」という中川教授の言葉に動かされ、ミノさんは初めての論文に挑み、記録や記憶を整理しながら完成させた。鉢の真田小学校で給食の調理員として勤務しながら、寝る時間を惜しんで書き上げた報告は、とても読み応えのあるものとなった。筆者もその報告書作成のサポートをさせていただいた。

民俗調査のレポートに初めて取り組んだとは思えないその力量の高さの背景として、ミノさんにはすでに書く実績があったことが大きい。当時の十日町市の社会教育活動の活発さは特筆されるが、特に各地域で発行された地域文集には、たくさんの女性たちの参加があり、ミノさんも吉田地区の地域文集である『信江』や『らくがき』などへ毎回のように投稿して、書くことは生きがいにもなっていた[5]。

ミノさんは、「木挽きの仕事と生活」の文章の最後に、「木挽きの調査を行いながら、今生きている者が消滅しようとしている「もの」の保存と、それを記録し後世に残してゆかねばならない役目があることを、また社会教育の重要性を身をもって強く感じることができた」と記しており[6]、その言葉の通り、婦人学級では地域の民話収録（1978 年）、鉢の昔話集の冊子刊行（1979 年）、「真田を調べる」学習（1980 年）など、集落の暮らしや歴史と向き合う学習に取り組んでいった[7]。

さらに、1979 年に十日町市博物館が開館すると、博物館友の会・民俗研究グループに所属して研究活動を始めた。アンギン研究で著名な故滝沢秀一氏をはじめ、隣家のトイさんや実姉のハルさんなど、

---

[5]　ミノさんは、「書くこと」の意味について、自分史の中で以下のように振り返っている。「文集のおかげで、自分の目でものを見、考えるよすがとなりました」「未熟な自分のものが新聞に活字となって載り、社会参加をみとめてもらえた時のよろこびは「幸せ」の一言につきます」（尾身ミノ『雪国に生きて』p. 17）。

[6]　『十日町市における文化財の調査　Ⅴ』同上。

[7]　『雪国に生きて』同上。

たくさんの仲間たちと生き生きと活動していた。

その代表的な成果として、1985 年度には「昔の遊びの再現について」という報告で、十日町市博物館友の会の第 2 回郷土記録賞佳作を受賞しており、ナンゴ（お手玉）や竹ナンゴについて実演し記録している。さらに 5 年後の 1990 年度には、「木挽き職人のこと」という報告で第 6 回同賞奨励賞を受賞している[8]。これは、以前の報告書で書き足りなかった部分を補完する目的で書かれたものであり、2 作品で一対となる貴重な調査報告となっている。一度まとめたテーマについて、再び違う視点で書き上げる情熱には驚かされる。また、ミノさんは、十日町市博物館友の会・民俗研究グループとして『妻有の庚申さま』（十日町市博物館友の会、1980 年）『野山のおやつ』（同、2004 年）の制作でも大活躍している。

この頃の十日町では市史編纂事業が行われていたが、郷土史家中心で編纂される『十日町市史』の発刊のみならず、市民による『市史リポートとおかまち』（第 1 集、1987 年～第 8 集、1995 年）も刊行され、中学生からの応募作品も掲載されるなど、市民参加の市史作りをめざして、市内全域で聞き取り調査が実施され、郷土を記録する機運に満ちていた。

このような鉢集落の女性たちの精力的な活動は、市内外からの注目を浴びていった。1997 年暮れには NHK ドキュメンタリー番組「小さな旅」の取材を受け、ミノさん、トイさん、ノブさんはじめ鉢の女性たちが出演して桜井洋子アナウンサーのインタビューを受け、翌月全国放送されたことは、集落にとって大きな出来事だった[9]。

その翌年には、ミノさんの数えの古希を祝って、自分史『雪国に生きて』が刊行された。こうした中でミノさんは、退職後の楽しみを兼ね、近隣の方々の協力を得ながら、木挽き以外の民俗資料の収集を始めた。自宅の 2 階を改造した小さな手作りの資料展示室をつくり、「明治・大正・昭和の館」と名付けてそのオープンを目指していた。そして、「石仏の案内をしたり、展示室でお茶飲み話をしながら、来訪者に木挽きの技を伝えていきたい」と願っていた。しかしその矢先、あの新潟県中越地震で被災（2004 年 10 月）、その翌春には自身が脳出血で倒れ、右半身麻痺のため鉢を離れた結果、公開されないままの展示室が残された。

1.2　石仏・語らいの家　　はじまり

「語らいの家」が生まれたのは、そんな状況を変えようと「鉢の同窓会」メンバーが立ち上がったことによる。そもそもの始まりは、前述した立教大学学芸員課程の調査実習である。この実習は非常に厳しく濃密なものであり、朝 7 時半から夜は 9 時、10 時までという連日のハードスケジュールで、民泊させてくださった「勘吉」「恕作」「しもの新宅（尾身ミノさん宅の屋号）」の 3 軒のお宅で受け

[8] 『妻有地方の暮らしと歩みⅡ郷土記録賞入選作品集　1990～1995 年』十日町市博物館友の会、2004 年 9 月。なお第 7 回郷土記録賞には、実姉の斉木ハルさんも「母の遺産―鉢の唄―」（唄の音声テープ）で受賞している。

[9] NHK「小さな旅　雪国につづるおんなの日記　～新潟県十日町市鉢～」は 1998 年 1 月 17 日に全国放送された。

たもてなしの温かさは、学生たちの身に染みた。その後、卒業し社会人になってからも、「鉢の同窓会」メンバーと鉢の人々との間に、まるで親戚のような交流がずっと続いて来たのは、他のどの実習地にもなかったことだった。誰かが就職した、結婚した、子供ができたという近況報告は、まず鉢に伝わり、新婚旅行を鉢にするカップルまで現れた。誰が、今どうしているかは、まず鉢のミノさんに聞いてみると、すぐに答えが返ってくるほど、鉢はみんなの情報基地になっていた。

首都圏から意外と近い十日町には、まだ豊かな自然のフィールドが残るだけでなく、豪雪にもめげず人々が温かく、地域の伝統行事も多く残されていて、大地の芸術祭など、現代アートと里山をつないで集客する仕組みもあり、第二のふるさと・鉢の魅力をますます大きなものにしていた。

とはいえ、無人の展示室を再開するなど、誰も手掛けることなどできなかった。考えられる限りのサポートは、HP 上で一部の資料を公開することだったが、完成したページのコピーを見てもミノさんは納得せず、あの資料室を何とかしてほしいと病床で願い続けた。

そうした中、海の家のように、夏休みだけの山の家なら、何とか乗り切れるかもしれないとひらめいた筆者は、すぐにプランを練って同窓会メンバーに提案、快諾を得て、ミノさんや、いとこ会[10]の皆さんにも計画を伝え、鉢とは何の関係もない友人も巻き込んで、公開に向けてのスタートを切ったのは、2008 年秋のことだった。

誰もが半信半疑のまま、動き出した企画だったが、メンバー一同、あの展示室を一度は公開し、たくさんの方に見てもらいたいと願う気持ちは一緒で、覚悟を決めれば、あとは自然に物事が動いていった。埼玉、神奈川、東京のメンバーが集まるため、ミーティングの場所は銀座に決めた。そのころ、銀座吉水という旅館で、月 1 回民映研のドキュメンタリー上映会があったため、ミーティング後にそこに合流することもあった。「石仏・語らいの家」という呼称は、その銀座でのミーティングで生まれたものだった。

また、「語らいの家」の企画が鉢集落の人々にスムーズに受け入れてもらえた素地として、2009 年第 4 回の大地の芸術祭では、2005 年に廃校となった鉢の真田小学校が、田島征三氏の「絵本と木の実の美術館」に生まれ変わり、集落はとても活気づいていたことも大きい。真田小学校は、ミノさんが長く調理を担当していた職場でもあった。

展示室公開にあたっては、同窓生全員が学芸員の資格を持っていることが強みとなり、企画、広報、展示、設営、資料の写真撮影や台帳整備も各自分担して、あっという間に準備が進んでいった。

1.3　石仏・語らいの家で行われた事業

開催期間（8/1～31）の毎週末には、メンバー各自が講師となって、ミニ講座を企画した。ミニ布ぞうりストラップ作りや、トールペイント講座、歴史講座、ゲストを招いてのオカリナ満月コンサート

[10]　いとこ会とは、ミノさんを支えようと、甥、姪やその家族で構成される集まりのことである。

や木版画講座、竹で作ったキャンドルナイトなどを実施し、なかでも最大の規模で実施されたのが、木挽きの技体験ワークショップであった。

(1) 木挽きの技体験ワークショップ

2009 年 8 月 22 日（土）、23 日（日）石仏駐車場で行われた木挽き体験会は、想像をはるかに超える本格的なものになった。メンバーの一人が、世田谷区次大夫堀公園民家園で江戸木挽きの林以一氏[11]の指導の下、木挽き体験を実施しているという情報を得て、見学に行き、その場で語らいの家への協力を依頼した。それに応え、木挽きの技を研究する秩父の大工棟梁・上林歳明氏はじめ、調査員の芝崎浩平氏、木挽きの会のボランティアの吉岡氏、前田氏が、マイ大鋸を持参して参加してくださった。地元の大工であったミノさんの甥でいとこ会会長の斉木健治郎さんは、杉の丸太でリン木を組み、体験の場を設置、手作りの欅の看板や、藍染の袢纏も準備してくれた。木挽きのイラストの入ったチラシは、メンバーの娘さんが描いてくれたもので、広報に大活躍した。

石仏駐車場で木挽きの体験会があるということは、鉢の区長さんの計らいで集落の有線放送でも流され、シニアカーでやってきたお年寄りは、「いい香りだなあ、木挽きをやっていれば、体がまっすぐになって、病気知らずだ」と話してくれた。力は入れず、体軸を整え、自然体で大鋸を挽くと、大鋸くずの良い香りに包まれ、手に伝わる鋸の振動が、とても心地よかった。力で押し切ろうとする男性より、むしろ女性や、子どものほうが楽に挽けるのも不思議だった。昔は女の木挽きもいたという。参加者は、鉢集落の方たちや同窓生チームとその友人や家族、いとこ会のメンバーに加え、石仏を訪れたたくさんの観光客も楽しそうに鋸を挽いてくれた。

棟梁の上林さんは、自分の鋸よりも、何年も使っていなかったミノさんの夫・国政さんの大鋸の方がよく切れると感心し、この鋸は体験会でも大活躍してくれた。

22 日午後と、23 日の午前、午後計 3 回の体験講座は大盛況のうちに終了した。22 日の夕食は、語らいの家で太子講を模した宴会を開き、遠方から手弁当で参加してくれた木挽きたちの労をねぎらった。ミノさんが大切にしていた屏風を飾り、長老のトイさんの唄う天神囃子[12]は、しみじみと胸に響いて、近隣のお母さんたちからの心づくしのごっつお（十日町市の方言で「ご馳走」の意）で、おなかも、心もいっぱいになった。

体験会で挽いた杉の丸太は、後日＜木挽きのベンチ＞として、石仏の照利庵前に奉納させていただいて、実際に使用してもらうことができた。鉢の尾身浩区長のほか、石仏保存会の会長にも色々な便宜を図っていただいた。

しかし物語はこれで終わらなかった。

11　林以一氏は江戸木挽き職人最後の一人と呼ばれ、氏の著作に『木を読む―最後の江戸木挽き職人』（小学館、1996 年）がある。

12　この地域の酒席でよく唄われる「天神囃子」は、～めでたきものは大根種～と始まり、先導が場を引き締め、会場をひとつにまとめる。この歌が終わるまでは、席を立って、他の人に酒を注いだりすることはできない。集落ごとに、歌詞や歌い方が少しずつ違っていて、それぞれの味がある。

語らいの家の建物は、実際に木挽き職人が暮らした、手作りの家であり、展示する資料も、当事者自身が使用し、調査し、収集したというユニークで、貴重なものである。夏の 1 か月間だけでなく、もう少し踏み込んで地域で活動したい、筆者のその思いが十日町市地域おこし協力隊への応募につながり、採用されて家族で十日町市へ移住、そして吉田小学校での、木挽きの体験授業（全校生徒＋祖父母希望者参加）へとつながってゆく。

(2) 木挽きの体験授業

2011 年 5 月 2 日（月）、まだ雪の残る校庭で、木挽きの体験授業が始まった。上林棟梁から「秩父で実施している体験授業を、十日町でもやってみませんか？」と提案されて実現したもので、講師には上林氏、小菅氏、芝崎浩平氏のほか、星野欣也先生（東京農業大学・日本刃物史）、特別ゲストとしてドイツから十日町に移住した建築家のカール・ベンクス氏も参加、語らいの家メンバーから川上さん、半田さん、夫、そして 5 名の地域おこし協力隊員も参加した。今回は、リン木は準備せず、杉の丸太を 3 本組み合わせて立てて用いた。その他に杉や欅、榎の丸太を準備し、子どもたちも、大人も交代で挽いた。星野先生は、二人引きの鋸を持参して、実演してくださった。前年度の準備から関わってくださった吉田小の富澤恵子校長先生も大鋸挽きを体験、大物の欅を、6 年生の女子が挽き切ったときには、周りを囲んでいた全員から拍手が沸き上がり、笑顔に包まれて体験授業は終了した。

また当日のみでは挽き切れなかった材を、元木挽き、故柳敬一郎氏[13]の指導の下、協力隊有志で挽き切り、後日吉田小校庭のベンチとして設置させていただいた。

1.4　石仏・語らいの家、その後

その後、語らいの家の展示資料は、予約制で希望者に公開してきたが、2012 年の芸術祭では、週末のみ一般公開し、次の 2015 年の芸術祭では、深澤孝史氏の「越後妻有民俗泊物館」の展示資料のひとつとして木挽き資料の一部が一般公開され、多くの来場者を得た。この「民俗泊物館」の展示は、越後妻有里山現代美術館（キナーレ 1 階）に移設され、国政さんの大鋸や営業記録帳、展示資料台帳などが、常設展示として 2018 年 3 月まで公開されていた。

1.5　今後の課題

現在、語らいの家は活動を休止しており、展示室は原則非公開、Web 上での案内のみとなっている（アドレス：http://ishibotoke.web.fc2.com/index.htm）。雨漏りなど家屋の傷みや、ミノさんや語らいの家メンバーの高齢化もあり、その存続が極めて困難な状況にある。

博物館、民俗資料館などの展示資料は、事柄の全体像を明らかにするために、使用者や生産者、使用地域などが異なるモノを、テーマごとに収集し展示公開することが通例である。それは調査する側

[13]　故柳敬一郎氏は、「小屋丸」という映画の中で、素晴らしい尺八の腕前を披露している達者な方で、尺八も自作されている。

の視点が主となっているのに対し、語らいの家の収蔵品は、使用者、生産者側、いわば調査される側からの視点で、自分たちの生きた時代を残そうとする試みであることが注目される。展示室の壁にかかる手書きの素朴な番付表は、当家新築の際の設計（平面）図で、間取り構成が一目瞭然であるし、鍋、釜、膳椀、箪笥、火鉢などほとんどの展示品が、語られるべき物語を持っていた。しかし館長であり、語り手であるミノさんを鉢に迎え、色々なエピソードを聞くことはもうできない。

どこの家にもあった民具たちは、ありふれているからこそ、改築や新築の際に大量廃棄されることが多かった。経済的価値がまず優先される時代にあって、手作りの民家に残るこうした貴重な記録資料が、伝えられ、活用されるすべが本当にないものか？すでに所蔵している資料と同じ種類は受け入れないという原則を持つ博物館が多いが、できることなら現在地での一括した保存、活用が望まれる。

本年 8 月末には、9 年ぶりの「鉢の同窓会」を開く予定でいる。それが最後の会合になってしまうか、それとも新しい目標に向かっていくことができるか、皆で知恵を出し合い、今後の継承の可能性を探っていきたい。

２．資料の概要

語らいの家に関する資料は、民具などの民俗資料と文献資料に大別される。以下では、その具体的内容について紹介したい。

2.1　民俗資料

既述の通り、ミノさんが木挽きや生活の道具を収集・保管し始めたのは、立教大学学芸員課程の調査実習メンバーとの交流や、真田婦人学級の活動、十日町市博物館友の会民俗研究グループでの活動が大きな影響を与えていたと思われる。ミノさんはこれらの活動を経て、何を地域に残し、伝えていこうとしていたのか。ここでは、語らいの家に収蔵されている民俗資料の紹介に加え、ミノさんの民俗研究の契機を作り出したと思われる十日町市博物館への寄贈資料にも触れる。

(1) 語らいの家に収蔵されている資料

語らいの家にて保管・展示されている資料については、台帳化された民俗資料が 325 点ある。主なものは、木挽きであった夫・国政氏の大鋸をはじめとする木挽き道具一式、出稼ぎ時に使用したマントやトランクのほか、大工であった父俊二氏の記した営業記録帳、ミノさんの結婚を祝って制作した手作りの鏡台や箪笥、自宅新築時の記録ノート、庚申講の膳椀や掛け軸のほか、衣類、ミノなどのわら細工、アンギン編み機（複製）、鍬、鎌、足踏み脱穀機や、縄ない機などの農機具、6 曲屏風、火鉢や食器類、羽釜、ぬか釜などの調理具、浪曲のレコード、子どものおもちゃなどである。

これらの資料の特徴は、豪雪地帯の庶民の暮しを伝える民俗資料であると同時に、衣食住のほとんどが家族の手仕事で構成されていることである。木を伐り、家を建て、田畑を耕し、服を縫い、食事

を作り、子どもを遊ばせ、冠婚葬祭を行う。わずか数十年前まで、こうした暮らしは、特別なものではなかった。けれど日本社会の激変の中、こうした庶民の暮らしの生活資料が、生活した家ごと保管され、記録されている例は珍しい。

(2) 写真・映像資料

語らいの家で保管されている写真は、立教大学の調査実習の時に撮影された石仏や鉢集落の風景が中心であり、その一部はデータ化されている。

映像資料は、鉢を取材したNHKのドキュメンタリー映像や、木挽き体験ワークショップの映像が保管されており、その一部はYou Tubeで閲覧可能である[14]。

音声データは、鉢に伝わる唄を録音したCD（尾身イク「昔の唄」）がある。

(3) 十日町市博物館への寄贈資料

博物館友の会の設立時から、民俗研究グループ員として幅広く活動してきたミノさんにとって、十日町の積雪期用具を収集して記録保存したいという博物館の意向には、協力を惜しまなかったものと思われる。

ミノさんから博物館へ寄贈された資料は、木挽き道具、木挽き装束のほか、衣類、民具など約200点である。それらは国指定の重要有形民俗文化財「とおかまちの積雪期用具」（1991年4月19日付、3868点）の一部をなしており、『雪国十日町の暮らしと民具』図録（十日町市博物館友の会、1992年）にも収録されている。ミノさんはこの調査に協力し、写真資料を提供しただけでなく、自らモデルとなってナガワタイレやサンパク姿で登場している。

調査－収集－記録－展示－図録出版というこの時の体験が、自らの資料収集のきっかけともなり、「明治・大正・昭和の館」展示室構想を生み出したのではないだろうか（但し、ミノさんは現在も療養中で、細かないきさつを確認できる状態ではないため、推測の域を出ないことをお断りしておく）。

2.2　文献資料

文献資料は大きく十日町市の民俗・郷土史に関する図書と、生活記録文集などの小冊子資料に分けられる。未整理の資料も多く確かな総数は不明だが、おおよそ200点以上の資料があり、ミノさんの原稿が掲載されているものは96点にも及ぶ。

(1) 図書

語らいの家に保管されている図書類は、『中魚沼郡誌』や『十日町市史』などの郷土史誌類、十日町市史編纂委員会や市民の郷土史家によってまとめられた産業・昔ばなし・方言等に関する図書、民俗調査関係のものが中心である。これらには地域固有の図書が数多くみられ、すでに絶版になっているものも多い。その他に、知人からの寄贈図書や絵本、海外の博物館図録などが75点ほど残されて

[14] 「Kobiki の技体験ワークショップ」（撮影：大野一博、2009年）等の映像がアップロードされている。（2018年5月6日現在）

いる。これらはミノさんが調査研究用に収集・使用してきたものである。

(2) 小冊子資料

冊子・文集類は、いずれもミノさんが文章を寄せていたものである。発行元で大きく 3 つに分けられ、(A) 鉢集落を対象範囲とする、吉田地区公民館真田分館・真田小学校発行の文集、(B) 吉田地区公民館の冊子・文集、(C) 十日町市博物館の冊子が残されている。(A)(B)の文集類は、ほぼ欠落がなく保管されている。

(A) 真田分館・真田小学校発行の文集

吉田地区公民館真田分館は真田小学校に設置され、分館主事は真田小学校の教員が担当していた。ここでは、真田分館と真田小学校が発行元の文集について紹介する。

真田分館発行の文集としては、婦人学級の一環で制作された生活記録文集『らくがき』(吉田地区公民館真田分館発行、1963 年～2007 年) が注目される。十日町市の生活記録実践は、『豪雪と過疎と』(未来社、1976 年)で知られるように、高度成長期前後にかけて市内各地の婦人学級で広がっていた。吉田地区でも 1960 年前後から 4 地域に分かれて婦人会や若妻会で婦人学級が行われ、当初から生活記録実践に取り組んでいた。真田婦人学級では、生活記録文集『らくがき』が 1963 年から毎年制作され、44 号まで続いた。集落単位の文集でこれほど長く続いた例は市内でも唯一である。

初期の『らくがき』は、一般的な農村女性の生活記録文集の傾向[15]と同様に「気楽な気持で書いたのですから　これは誰の文か等せんさくしないで下さい。こんな事を考えた人もあるなあ位でとめて下さい」(『らくがき』1 号)、「誰が書いたかわからないから楽々書けたのです」(同 2 号) と冒頭に書かれているように、無記名だからこそ日々の想いや不満を書けた状況がうかがえる。文の形式は、作文・詩・俳句など自由であった。内容は、冬に制作されることから豪雪の厳しさや出稼ぎ、農業のあり方への不満が多くつづられている。内容について、編集者 (おそらく分館主事であろう) が、「成長のあとが見られます。」「みんな解る仲間だもの。」(同 3 号) と、執筆を励ましてきた様子がうかがえる。次第に記名の投稿も増えている。第 10 号までは分館主事である小学校教員が編集・制作していたが、第 11 号からは分館主事の支援を受けつつ婦人学級生らによって自主制作されるようになった。当文集は、真田小学校の廃校とともに終わりを迎える。

真田小学校発行の文集としては、『鉢沢川』(1969 年発刊) という出稼ぎ文集が残されている。当文集は、出稼ぎ先の父親らに向けて書かれた手紙のような性格を持つものである。子どもたちの作文が主であるが、母親も文章を寄せている。当時の真田小学校では、集落の抱える課題に歩み寄り、公民館活動ともつながりを持つ教育実践が行われていたということがうかがえる資料である。鉢集落における社会教育と学校教育の関連は、場所や人が重なっていることから非常に深いものであったと思われる。

---

[15] 辻智子「農村で女が「生活を書く」ということ―1945 年-1960 年代の生活記録運動から―」『国立婦人教育会館研究紀要』2、 独立行政法人国立女性教育会館、1998 年。

なぜ、鉢集落の人々は書き続けたのだろうか？市内でも生活記録文集が盛んに出された地域は、山間部に多かったといわれている。それは、男性たちの出稼ぎが盛んであるゆえに、冬のあいだ家を守らねばならなくなった女性たちの不安や苦しい思いの鬱積がそうさせたのではないか、という指摘がある[16]。しかし、市内の類似地域の中でもこれほど継続したことはまれであり、『らくがき』が真田小学校の廃校まで続いたことや、分館主事が教員だったことから、分館活動がどのように行われていたのか、社会教育主事－地区公民館主事－分館主事の支援のあり様こそ焦点となるように思われる。

また、初期の文集では無記名が多いが、徐々に記名の投稿や地域の課題に踏み込む投稿も増えていくことから推察するに、学習集団づくりにも主事らの地道な支援の工夫があったと推察される。

このような集落単位の文集・冊子類は、そのローカル性の高さゆえに「取るに足らない」「数ある中のひとつ」とみなされがちであり、公的に保管・管理されてこなかった。しかし、地域に深く根ざして言葉が綴られた文集とは、人々にとって一番身近な地域社会である「集落」という規模で教育実践がいかに行われていたのか、どのような思いがそこにあったのか感じられる重要な手がかりである。これらの文集が語らいの家にまとまって保管されていることの意義は計り知れない。

(B) 吉田地区公民館発行の冊子・文集

吉田地区公民館では、地区内の全婦人学級に生活記録の投稿を呼びかけて制作された文集『信江』(吉田地区公民館発行、1963 年～継続中) と、地区の高齢者による文集『碑文』(1988 年～継続中) がある。

特筆すべきは、文集『信江』が、市内で今でも継続する数少ない文集のひとつであるということだ。もう一つは飛渡地区の文集『わらぼし』があり、両文集ともにその性格は婦人学級生の生活記録から地域住民が思い出やエッセイなど自由な形式で投稿できる文集として変化しているものの、その発行は年に一度の恒例行事として地区の公民館活動として根づいてきた。

『信江』の編集には地域住民も参画している。50 年以上にわたって地区公民館で地域住民と協働した文集活動が続いてきたというのは全国的にも数少ない例といえよう。同様に、『碑文』という明治、大正、昭和三代にわたる思い出の体験記も、2 年に一度の制作が続いている。

先述の『らくがき』や『信江』・『碑文』には、ミノさんをはじめ初期から継続的に原稿を寄せている住民が多く見られることから、各号を通して一人ひとりの生の歴史を感じることができる。また、当時の婦人学級の活動や参加者の実情など地区公民館・分館の実態について住民の側から探ることができる数少ない資料である。

さらに、冒頭に記したように、プール建設などの文集で訴えた内容が地域づくりにつながる経験は、当時の農村に暮らす女性たちにとって大きな手ごたえであっただろう。これらの資料を手がかりに、その展開条件を検討することは、コミュニティの周辺に位置する人々のエンパワメントと地域変革の条件を示唆してくれよう。

[16] 『豪雪と過疎と』同上。

(C) 十日町市博物館友の会発行の冊子類

十日町市博物館友の会による冊子は、『妻有地方の暮らしと歩み』シリーズ（1990 年、2004 年）が残されている。十日町市博物館は開館以来、友の会とともに地域博物館のあり方を模索して事業づくりに取り組んでいた。その一環として、「地域の風土や埋もれている歴史、人々の生活の足跡を記録し、後世に伝えよう」という目的で「郷土記録賞」が設けられ、市民から募集した原稿をまとめた冊子が『妻有地方の暮らしと歩み』である。ミノさんが受賞した論考（「昔の遊びの再現について」・佳作。1990 年）（「木挽き職人のこと」・奨励賞。2004 年）も掲載されている。

これらに加え、友の会民俗研究グループ活動の成果である冊子類として、『妻有の庚申さま』(1980 年)、『野山のおやつ』(2004 年）がある。また、若干数ではあるものの、友の会だより「火焔」や民俗研究グループ会報「世間ばなし」も残っており、日々の学習活動の様子を垣間見ることができる。ミノさんがいずれの調査にも熱心に参加していたことがうかがえる。地域生活・文化への民俗学的アプローチがどのような学びとなっていたのか、鉢の地域づくりとの関連が興味深い。

(A)～(C)の資料のほかにも、ミノさんの文章が掲載された新聞や冊子類、ミノさんの単著や旅行記など多岐にわたって保管されている。

これらの文献資料は、高度成長期という中山間地域にとって非常に厳しい時代を生き抜いてきた女性たちの思いに迫ることのできる資料群であり、彼女らにとって「書く」こと、「地域の歴史を学ぶ」ことはどのような意味があったのかを分析する際の手がかりとなるだろう。また、分館－地区館－市施設の各資料をつき合わせて検討することで、「分館」という最も地域に密着したレベルでの地道な活動が、地区や十日町市全体の活発な学習活動・市民活動にいかなる影響を与えていたのか、その検討を可能とする道筋が開かれよう。

さらに、これらの文献資料がミノさんの家で、明治―大正―昭和を通して用いられてきた様々な民具類と合わせて管理されているからこそ、鉢集落の暮らし―生業―教育活動を包括的かつ具体的に読み解くことが可能となる。ミノさんをはじめとする鉢集落の女性たちが、人生をどのように切り拓いてきたのか、その過程において公民館・博物館における学習活動がどのような力となっていたのか。鉢の文化や鉢に生きてきた人々の人生と出会うことのできる場が「語らいの家」なのである。

ただ、手書きで謄写印刷された資料類は紙の劣化が著しいため、デジタル化や修復・保全が重要な課題となっている。所蔵している資料の中には図書館や公民館で公的に残されておらず唯一性が高いものもあることをふまえて、保存の在り方を模索する必要がある。

終わりに

本稿では、「石仏・語らいの家」のあゆみと抱える課題、その収蔵資料について紹介してきた。当

施設は、鉢集落の住民による私設郷土資料館の様相であり、建物・収蔵資料が鉢集落の記憶を凝縮している。語らいの家は、この土地と切り離せないもの、道具、技、知、ことばの存在を浮かび上がらせており、まさに鉢集落で生きてきた人々が生き様を未来に託すバトンなのである。

また、尾身ミノさんは戦後まもなくから社会教育施設での学習活動に取り組み続けた方であり、保管されている数多くの生活記録や文章からは、彼女の学習活動の展開を継続的にたどることができる点も社会教育実践の戦後史研究における価値が見いだせよう。

このように、十日町市内ではローカル性の高い地域資料の収集に取り組んできた市民が少なからずいるが、高齢の人々は資料をいかに次世代に手渡すか、その記憶をどう伝えていくかという問題と向き合わざるをえない状況にある。

一方、自治体博物館や図書館等の社会教育施設において、膨大に増えていく資料の寄贈を受け入れ、管理することの困難さが指摘されてきた[17]。寄贈図書の廃棄問題は跡を絶たず、2012年には文部科学省から公立図書館の基準として「郷土資料及び地方行政資料の電子化」(『図書館の設置及び運営上の望ましい基準』2012年12月19日文部科学省告示第172号）が告示されたが、人材や財源の不足という厳しい運営状況で手が回らないことも多い。今後は、地域資料の保管や取捨選択をめぐって行政と市民の協働による新たな仕組みづくりが必要とされるだろう。

高齢者の持つ資料や知恵の継承の試みとして、十日町市飛渡地区では、地域おこし協力隊が地域住民と「三ツ山昔語りの会」の取り組みを進めている。三ツ山集落で生活している／いた高齢者が地域資料を囲んで語らう場を設け、その語りのデータ蓄積を進めている。同地区のNPO「地域おこし」では、若い移住者スタッフが写真・動画で高齢者の農作業や地域行事、郷土料理づくりの風景を記録している。現状では世代間継承の取り組みが「点」として市内に散らばっている状況である。公的に一括管理・保存することが困難となりつつあるならば、これらの取り組みをネットワーク化し、地域資料を現地保存しながらも、どこにどの資料があるか公的にデータベース管理できるような展開も必要となってくるだろう。

全国的に若い世代の「田園回帰」志向の高まりが注目されているが、そこにはグローバリゼーションの深まりや3.11の経験以降、「経済」を「自然」と「暮らし」の間に「埋め戻し」、つなぎ直していくような個人観、社会観への関心の高まりがあるという[18]。自然と共生しながら生き抜いてきた農山村の人々の知恵は、地域社会の未来を考えるヒントが埋め込まれている。次世代が歴史と対話しながら未来をデザインしていくために、地域資料の持つ可能性を地域住民が存分に引き出せる環境の整備が進むことを期待したい。

17　大谷卓史「図書館における寄贈本の受難　学術資料としての可能性とその限界」『情報管理』vol.70, No,4、国立研究開発法人 科学技術振興機構、2017年。

18　藤山浩『田園回帰1%戦略　地元に人と仕事を取り戻す』農文協、2015年。